阿倍仲麻呂

要旨

海から昇る二十日の月を見て、その昔の阿倍仲麻呂の故事を思い出す。阿倍仲麻呂が唐で別れに臨んで詠んだ歌を、唐土の人も聞いて感じ入ったそうだが、同じ月の光による感情には変わりがないのであろう。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P七七・2〈出ださず。〉	十九日。天候が悪く、船を出さない。
第二	P七七・3〈二十日。〉～P七七・5〈寝も寝ず。〉	二十日。昨日同様、船を出さない。人々は過ぎる日々を数え、嘆き、寝られない。
第三	P七七・6〈二十日の〉～終わり	二十日の月が海から上がるのを見て、阿倍仲麻呂の故事を思い出す。阿倍仲麻呂は唐土から帰れなかった時に日本では和歌を詠むと言って、和歌を詠んだ。それに唐の人も感動したことを思い出して、歌を詠んだ。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については巻末参照。）

①十九日（名）。②日（名）悪しけれ（形シク・已）ば（接助・順理）、船（名）出ださ（サ四・未）ず（打消・終）。

③二十日（名）。④昨日（名）の（格助・体修）やうなれ（比・已）ば（接助・順理）、船（名）出ださ（サ四・未）ず（打消・終）。⑤みな人々（名）、憂へ（ハ下二・用）嘆く（カ四・終）。⑥苦しく（形シク・用）心（名）もとなけれ（形ク・已）ば（接助・順理）、ただ（副）日（名）の（格助・主格）経（ハ下二・用）ぬる（完・体）数（名）を（格助・対象）、今日幾日（名）、二十日（名）、三十日（名）と（格助・引用）数ふれ（ハ下二・已）ば（接助・順理）、指（名）も（係助・同類）損なは（ハ四・未）れ（受・用）ぬ（強・終）べし（推・終）。⑦いと（副）わびし（形シク・終）。⑧夜（名）は（係助・区別）寝（ナ下二・未）も（係助・強意）ず（打消・終）。

⑨二十日（名）の（格助・体修）夜（名）の（格助・体修）月（名）出で（ダ下二・用）に（完・用）けり（詠・終）。⑩山（名）の（格助・体修）端（名）も（係助・強調）なく（形ク・用）て（接助・単接）、海（名）の（格助・体修）中（名）より（格助・起点）ぞ（係助・強調（係））出で来る（カ変・体（結））。⑪かうやうなる（形動ナリ・体）を（格助・対象）見（マ上一・用）て（接助・単接）や（係助・疑問（係））、昔（名）、阿倍仲麻呂（名）と（格助・引用）言ひ（ハ四・用）ける（過・体）人（名）は（係助・提示）、唐土（名）に（格助・帰着）渡り（ラ四・用）て（接助・単接）、帰り来（カ変・用）ける（過・体）とき（名）に（格助・時間）、船（名）に（格助・対象）乗る（ラ四・終）べき（当・体）所（名）にて（格助・場所）、かの（代）国人（名）、馬のはなむけ（名）し（サ変・用）、別れ（名）

①十九日。②天気が悪いので、船を出さない。

③二十日。④（天気が）昨日と同じようであるので、船を出さない。⑤皆々は、心配し嘆いている。⑥辛く不安なので、ただ、日が過ぎる数を、今日で何日、二十日、三十日と数えると、（数が多すぎて）指を痛めてしまうに違いない。⑦実に悲しい。⑧夜は眠れもしない。

⑨二十日の夜の月が出たことだ。⑩（ここは都と違い）山の端もなくて、（なんと）海の中から出て来るのだった。⑪このような月を見てのことだろうか、昔、阿倍の仲麻呂といった人は、唐土へ渡って、（日本に）帰って来（ようとし）た時に、船に乗るはずの所で、あちらの国の人が、送別会をして、別れを惜しんで、あちらの漢詩を作りなどしたということだ。

惜しみ／て、／かしこ／の／漢詩作り／など／し／ける。／⑫飽か／ず／
マ四・用／接助・単接／代／格助・体修／副助・例示／サ変・用／過・体(結)／カ四・未／打・用

や／あり／けむ、／二十日／の／夜／の／月／出づる／まで／
係助・疑問(係)／補動・ラ変・用／過推・体(結)／格助・体修／格助・体修／格助・体修／ダ下二・体／格助・範囲

ぞ／あり／ける。／⑬その／月／は／海／より／ぞ／
係助・強調(係)／ラ変・用／過・体(結)／代／格助・体修／係助・区別／格助・起点／係助・強調(係)／

仲麻呂／の／主、／「我／が／国／に、／かかる／歌／を／
格助・体修／代／ダ下二・用／係助・同趣／格助・起点／格助・体修／格助・場所／連／格助・対象／

見／て／ぞ、／なむ、／神代／より／神／も／
マ上一・用／接助・単接／係助・強調(係)／係助・強調(係)／格助・起点／係助・同趣／

出で／ける。／⑭これ／を／
ダ下二・用／過・体／代／格助・対象／

詠ん／給び、／今／は／上／中／下／の／人／も、／
格助・体修／マ四・用(撥音)／補動・バ四・用(尊)仲麻呂→神／係助・区別／格助・体修／

かうやうに／別れ／惜しみ／、／喜び／も／あり、／悲しび／も／ある／とき／に／
形動ナリ・用／マ四・用／係助・列挙／ラ変・用／係助・列挙／ラ変・体／格助・時間

は／詠む。」／と／て、／詠め／り／ける／歌、／
係助・区別／マ四・体・(結)／格助・引用／マ四・已／完・用／過・体(流れ)／

青海原／振りさけ／見れ／ば／春日／なる／三笠の山／に／出で／し／
マ上一・已／接助・確偶／在・体／格助・場所／ダ下二・用／過・体

月／かも／
終助・詠嘆

と／ぞ／詠め／り／ける。／⑮かの／国人、／聞き知る／まじく／
格助・引用／係助・強調(係)／マ四・已／完・用／過・体(結)／代／格助・体修／ラ四・終／打推・用／

思ほえ／たれ／ども、／言／の／心／を、／男文字／に／さま／を／
ヤ下二・用／完・已／接助・逆確／格助・体修／格助・対象／格助・手段／格助・対象／

⑫（それでもなごりが尽きず）満足できない（ように思った）のだろうか、二十日の夜の月が出るまで（そこにとどまって）いたのだそうだ。

⑬その月は（やはり）海から出たという。

⑭これを見て、仲麻呂殿は、「私の国ではこのような歌を、神代から神様もお詠みになり、今では（身分の）上中下の（どんな）人でも、このように別れを惜しんだり、喜び事があったり、悲しみがあったりする時には詠むのだ」といって、詠んだという歌は、

青海原……（青々とした大海原のはるかかなたの空を見渡すと、
《ちょうど今上ってきたあの月は》春日にある三笠山の上に出た月《と同じ月》なのだなあ）

と詠んだのだそうだ。

⑮あちらの国の人は、（この歌を）聞いても（言葉が違うので）分かるまいと思われたけれども、歌の意味を、漢字で概略を書き出して、こちら（日

書き出だし／て、／ここ／の／言葉／伝へ／たる／人／に／
サ四・用／接助・単接／代／格助・体修／ハ下二・用／完・体／格助・対象

言ひ知らせ／けれ／ば、／心／を／や／聞き得／たり／けむ、／いと／
サ下二・用／過・已／接助・順偶／格助・対象／係助・疑問(係)／ア下二・用／完・用／過推・体(結)／副

思ひのほかに／なむ／賞で／ける。／⑯唐土／と／こ／の／国／と／
形動ナリ・用／係助・強調(係)／ダ下二・用／過・体(結)／格助・比基／代／格助・体修／格助・比基

は、／言／異なる／もの／なれ／ど、／月／の／影／は／同じ／こと／
係助・区別／形動ナリ・体／断・已／接助・逆確／格助・体修／係助・区別／形シク・終

なる／べけれ／ば、／人／の／心／も／同じ／こと／に／や／
断・体／当・已／接助・順理／格助・体修／係助・同趣／形シク・体／断・用／係助・疑問(係)

あら／む。
補動・ラ変・未／推・体(結)

⑰さて、／今、／そのかみ／を／思ひやり／て、／ある／人／の／詠め／
接／格助・対象／ラ四・用／接助・単接／連／格助・主格／マ四・已

る／歌、／
完・体

都／にて／山／の／端／に／見／し／月／なれ／ど／波／より／
格助・場所／マ上一・用／過・体／断・已／接助・逆確／格助・起点

出で／て／波／に／こそ／入れ／
ダ下二・用／接助・単接／格助・帰着／係助・強意(係)／ラ四・已(結)

本）の言葉を習得している人に話して聞かせたところ、意味を理解（することが）できたのだろうか、まったく意外なほど（感心して）誉めたということだった。⑯唐土とこの（我が）国とは、言葉は違うものなのだが、月の光は同じであるはずだから、人の感情も同じことなのであろうか。

⑰さて、今、当時を想像して、ある人が詠んだ歌、

都にて……（都で山の端に見た月であるが、《海上の今は》波から出てまた波に入ってゆくことよ）

学習活動のポイント

導入

学習活動のポイント

❶「阿倍仲麻呂」について調べてきたことを発表する。［知技(1)ア］

❶「古今和歌集」の本文に当たらせる。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

展開

学習活動のポイント

❶「阿倍仲麻呂」を音読する。［思判表B(1)ア］

❷重要古語の意味・用法を確認する。［知技(1)ウ・(2)ウ］

↓**「言葉と表現」1**

❸現代語訳し、内容を確認する。［知技(1)エ］［思判表B(1)ア］

❹作者が阿倍仲麻呂を想起した理由を考える。［思判表B(1)イ］

↓**「学習のポイント」1・2**

❺阿倍仲麻呂の故事について理解する。［知技(2)ア］［思判表B(1)ア］

↓**「学習のポイント」3**

❻「都にて」の和歌に込められた心情を読み味わう。［思判表B(1)エ］

❶区切りを意識し、聞き手にわかりやすい音読を心掛けさせる。

【評価】「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷係り結びに留意する。また、「べし」や「けむ」などの助動詞を文脈に即して解釈させる。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸現代語訳は逐語訳を基本に正確な理解を徹底させたい。あいまいで感覚的な訳をしていては正確な読解力は身につかない。

❹「月」がポイントになるが、どのような「月」かを、前後の状況と合わせて考えさせる。

【評価】 作者が阿倍仲麻呂を想起した理由について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、確認する。

❺阿倍仲麻呂が置かれた状況、唐人との交流などを本文に即してまとめさせる。

【評価】 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解しているか、確認する。

・阿倍仲麻呂の故事について叙述を基に的確に捉えているか、ペーパーテストにより、確認する。

❻二首の歌に込められた心情を比べながら考えさせる。描かれた景物との関わりにも留意する。

【評価】 二首の和歌に込められた心情について、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、意見交換をさせ、発表により、確認する。

■まとめと発展

学習活動のポイント

❶「土佐日記」における和歌の役割を考える。 知技(1)オ・(2)エオ 主態 →**「言語活動」1**

❶共通の心情を詠む歌を引き合いに出すことにより、どのような効果が生じているか、考えさせる。和歌が周囲の人々へどのような影響を与えているのかにも留意する。

【評価】 我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解しているか、確認する。

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。

・歴史的な文体の変化について、日記文学が、日記文学が単なる事実の記録にとどまらず、作者の思想や人々の心情を掘り下げることのできる文学形態であることに理解を深めているか、確認する。

・進んで日記文学の特徴や成立の背景や助動詞「べし」の意味と用法を理解し、学習課題に沿って、「青海原」「都にて」の歌に込められた心情を考え、作者が「青海原」の歌を引用した理由を話し合おうとしているか、分析する。

発問例

●七七ページ

問 **「日悪しければ」（2行目）とはどのような状態か。**

答 船が出航できないような天候の悪さ。

補 風向きが悪いなど考えられる。また、一説には吉凶のことだとも考えられている。

問 **二十日の月は何時頃出るか。**

答 夜十時過ぎ。

補 月の出は、多少のずれはあるが、十五夜が夜六時頃、それから一日に五十分ぐらいずつ遅くなってゆく。

問 **「指も損なはれぬべし」（4行目）とあるが、なぜか。**

答 大きい数を数えるために、何回も指を使うから。

問 **「見てや」（7行目）の「や」の結びについて説明せよ。**

答 「漢詩作りなどしける。」の「ける」が、結びになっている。

補 係助詞と結びとの間が離れているので、注意させる。

問 **「かの国人」（8行目）とあるが、どこの国の人か。**

答 唐土。

補 「かしこの漢詩」（同・9）、「唐土とこの詠嘆。

語句の研究

●七七ページ

2十九日　承平五（九三五）年正月十九日。

2日悪しければ　天気が悪いので。前日の記事に「海荒ければ、船出ださず」とあるのに対応。

3心もとなければ　不安なので。

4指も損なはれぬべし　指折り数える日が多すぎて、指も痛めてしまうに違いない。諧謔的な表現。

5いとわびし　実に辛い。

5寝も寝ず　眠れもしない。名詞「寝（い）」を係助詞「も」が受ける形。

6二十日の夜の月出でにけり　月齢二十日の月は、だいたい夜の十時を過ぎて出る。十五夜の月は日没とともに出、十六夜の月は「いざよひ」、十七日の月は「立ち待ち」、十八日の月は「居待ち」、十九日の月は「寝待ち」というように、月の出の時刻はだんだん遅れ、二十日以後の月は深夜以降に出る。この時期は「宵闇」となる。また、夜明け後も西や南の空に残るので、これを「有明の月」とも言う。「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形。「けり」はこの場合は

6山の端もなくて、海の中よりぞ出で来る　教科書では省略したが、あとに「都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ」の歌があり、「山の端」とわざわざ断っているのは、山に囲まれた京に生い育ち、京を生活の本拠として来た作者の自然の感情であろう。海の中から出る月に一種新鮮な感興を覚えて「海の中よりぞ出で来る」と強い感動を示しているのである。一月八日の記事にも「今夜月は海にぞ入る」とある。「山の端」は山の上部の空に接する部分。なお、二十日の停泊地を室津とすると、半島の西側に当たり、海から月が出ることはないとされる。貫之の脚色か、あるいは停泊地に変更があったのかも知れない。

7かうやうなる　後に「月」が省略されている。「かうやう」は「かくやう」のウ音便。

7見てや　「や」は疑問の意をあらわす係助詞。この結びは推量の助動詞であることが多い。「や」の結びは、あとの「漢詩作りなどしける」の「ける」である。結びは「けむ」とありたいところであるが、「けり」は「伝聞」に基づく過去を回想する助

国」（P七八・3）などの表現に注意させる。

問 ◉**「かしこ」（9行目）とは、どこのことか。**

答 唐土。

問 **「漢詩」（9行目）に対するものは何か。**

答 和歌。

補 大和歌の意であるが、平安時代初め、外国詩である漢詩流行によって日本古来の歌と区別する必要が生じてからの称である。

問 **「その月」（10行目）とは何を指すか。**

答 仲麻呂の見た月。

補 貫之も同じ海に出る二十日の月を見ているので、注意深く読んでいくようにさせる。

問 **「これを見てぞ」（10行目）の「ぞ」の結びについて説明せよ。**

答 本来「詠めりける歌」の「ける」にかかって結ぶところ、文が続いていったので結びが流れた。

補 「結びの消滅」「結びの解消」ともいう。

問 **「かかる歌」（11行目）とはどのような歌か。**

答 和歌。

補 直前の「我が国」は勿論日本のことである。

●七八ページ

問 **「言の心を、男文字にさまを書き出だし」（1〜2行目）とは、どのようにしたというのか。**

動詞で「…とかいうことだ」の意を表すので、疑問の係助詞をうけても不自然に感ぜられなかったのであろう。「や」を感動の意をあらわす間投助詞とみる説もある。

7阿倍仲麻呂　文武天皇二（六九八）年〜宝亀元（七七〇）年。中務大輔船守の子。十六歳のとき遣唐留学生として渡唐、玄宗皇帝に仕えて名を朝衡と改めた。天平勝宝年間、遣唐使藤原清河に従って帰国しようとしたが、風波のために果たさず、再び唐にもどった。のち粛宗に仕え、宝亀元年かの地で没した。七十三歳という。「言ひける人」の「ける」は伝聞に基づく過去の助動詞「けり」の連体形で、「…とかいった」「…だそうだ」の意。仲麻呂の話は人づてに聞いた昔話であるという気持ちを表現する。

7帰り来ける時　実際には仲麻呂は途中で暴風に遭い安南に漂着、唐にもどって住みつくことになる。

8馬のはなむけ　「門出」語句の研究参照。

9飽かずやありけむ　名残がつきなかったのだろうか。「飽かず」は「満足しない」「物足りない」の意。「けむ」は過去推量の助動詞。上の「や」を受けて連体形になっている。この部分は挿入句的に独立している。

10これを見てぞ　係助詞「ぞ」は下の「とて、詠めりける歌」の「ける」にかかるが、「ける」が連体形なのは直接下の「歌」に接続するためであって、ここで文が終止しないため、結びは流れた。

10仲麻呂の主　「主」は人名の下に添えて敬意を表す語。一月八日の記事に、「業平の君」とあるので、「主」は「君」よりも敬意は軽く、中流階級出身の人に用いたらしい。

11詠ん給び　「詠み給び」の撥音便。「給ぶ」はバ行四段活用の尊敬の補助動詞、意味は「給ふ」に同じ。

14青海原……　「古今和歌集」巻九羇旅には初句「あまの原」とある。おそらく貫之がここにふさわしいように改作したのであろう。なお古今集左注に「この歌は、昔、仲麿を唐土に、物習はしに遣はしたりけるに、数多の年を経て、え帰りまうで来ざりけるを、この国より又使まかり至りけるにたぐひて、まうで来なむとて、出で立ちけるに、明州と言ふ所の海辺にて、かの国の人、餞　別しけり。夜に成りて、月のいと面白くさし出でたりけるを見て、よめるとなむ語り伝ふる」とある。なお、この時の

答 歌の意味を漢字で書いて、の意。

補 「男文字」は漢字のことで、平仮名を「女手」というのに対している。平仮名は平安期になって女性たちの手によって使われてきたのでこう呼ぶ。男性はもっぱら漢字を使用していたので、貫之が平仮名で「土佐日記」を書いたのは画期的なこととされる。なお、仲麻呂の時代は「女手」はまだ作られていない。

問 **◉「ここの言葉」（2行目）とあるが、どこの言葉か。**

答 日本の言葉。

補 「ここの言葉伝へたる人」の「ここ」は、『土佐日記』の作者の立場から見ての「ここ」であり、日本語を習い覚えていて現地の人に伝達する人の意だが、通訳と考えて良い。ただし、仲麻呂はその時点で三十数年現地にいたので、通訳の必要はなかったと考えられる。貫之の脚色と考える。

問 **◉「賞でける」（3行目）の主語は誰か。**

答 かの国人。

補 この直前の「心をや聞き得たりけむ」も同じ。

問 **「言異なる」（3行目）とはどのようなことか。**

答 使う言葉が中国語と日本語とで違うという「馬のはなむけ」が二十日に行われたという確証はない。「振り放け見れば」は「ずっと遠く見わたすと」。「振り放く」の連用形に「見る」が付いたもの。「ふりむいて遠くを見る」。「三笠なる」の「なる」は存在を表す断定の助動詞で、この場合、連体形であることが多い。「三笠の山」は奈良市奈良公園の東にある山。御蓋山とも書き、春日山ともいう。契沖（けいちゅう）の「古今余材抄（こきんよざいしょう）」によれば、遣唐使はこの山で塞の神を祭ったという。「かも」は詠嘆の意をあらわす終助詞。

14春日　現在の奈良県奈良市街東方の丘陵地を指す。三笠山（御蓋山）もこれに含まれる。

● 七八ページ

1聞き知るまじく思ほえたれども　「（日本語なので）理解できまいと思えたけれども。」「聞き知る」は複合動詞。「聞いて理解する」「聞いて悟る」「聞きわける」の意。「まじく」は打消の推量を表す助動詞「まじ」の連用形。「思ほえ」は「思ふ」に上代の自発の助動詞「ゆ」がついて一語となったもの。「思はゆ」→「思ほゆ」→「覚ゆ」と変化した。

1言の心　歌の意味。「言」はここでは「歌」の意。

1男文字　男手。漢字のこと。平仮名を女手というのに対する言い方。

2さま　ようす。外形的な状態をいう語。ここでは「心」が歌の内部的な意味や気持ちをいうのに対して、「さま」は歌の大体の筋、趣をいう。「男文字にさまを書き出だして」は和歌の意味の概略を漢詩か漢文かに翻案し書き示したというのであろう。

4月の影　月の光。

4人の心も同じことにやあらむ　「（それに対して動く）人の気持ちも同じことであるのだろうか。」「同じ」はシク活用形容詞の連体形。この形容詞に限って、連体形が「同じ」「同じき」と両様に用いられる。「に」は断定の助動詞「なり」の連用形。「や」は疑問の係助詞。また「ありけむ」といわないで「あらむ」としたのは、単に仲麻呂の故事を回想する気持ちだけでなく、そこから離れて、作者自身の感想を一般的に述べるためであろう。「あら」は、補助動詞としての用法。

5そのかみ　当時。仲麻呂が歌を詠んだ当時。

5思ひやりて　想像して。

こと。

問 **「月の影」（4行目）を現代語訳せよ。**

答 月の光。

補 ここでは「月」そのものと取ってもよい。「月」と「人の心」とを対応させている。

問 **「人の心」（4行目）とは、ここではどのような「心」か。**

答 故郷を懐かしむ心。

補 中国では「月」を見て故郷を思うことがしばしば漢詩に詠まれている。

問 **「ある人」（5行目）とは誰か。**

答 作者（紀貫之）。

補 女性仮託に伴う第三者的表現である。

鑑賞

阿倍仲麻呂（六九八年～七七〇年）は、今でも日本人になじみの深い、人気の歌人である。それはその歌によるところも大きいが、やはりその劇的な生涯が人々の心をとらえるのであろう。

遠い異国の地にとどまり、ふるさとを夢見つつ帰ることのできなかった、それは一つの文学パターンとして、人々をとらえた。「平家物語」の俊寛僧都のように、足摺をして叫びつつも、ついに帰国はかなわなかった例もある。

仲麻呂の歌は「古今和歌集」に伝えられている、「あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」が原型である。「新撰和歌」、「百人一首」にもこの形で収められている。

仲麻呂が遣唐使として唐土に渡ったのが養老元（七一七）年、唐朝の官吏としてかの地にとどまること三十数年を経て、同じく遣唐使の藤原清河・吉備真備らの一行と帰国しようとしたのが、天平勝宝五（七五三）年であった。この一首はそのときの歌と考えられる。仲麻呂はこの後故国に向けて出発するが、清河、仲麻呂の乗った船は難破し、大陸に押し戻されてしまう。他の船は薩摩に上陸するが、それには後に日本に帰化する鑑真（六八八年～七六三年）が乗っていた。仲麻呂は、結局帰国を断念し、異国の土に化したのである。

従って、この歌は、難破の後のものではないということになるから、帰国の期待、喜びの中で詠まれたということになるが、唐土に三十五年もいた後であるから、望郷の歌と考えられてきたものであろう。

この歌が実際どこで作られ、どのようにして我が国に伝えられたかは不明であるが、仲麻呂の作と考えられてきたのはすでに平安初期のことらしく、当然、貫之は自ら撰に携わった「古今和歌集」に仲麻呂の作としてとったはずである。

仲麻呂の悲劇から百五十年経た紀貫之の時代にも、仲麻呂は常に人々に思い出されていた。「土佐日記」の旅の途次、月を見て、貫之は書かずにはいられなかったということであろう。土佐出発以来すでに一ヶ月近く過ぎた長い船旅で、一月二十日の時点ではもう十日も同じ所に足止めされた後であるからなかなか都にたどり着けないという気持ちが、いっそうこの歌を思い出させたのであろうか。

ただし、貫之は、文芸作品として、この歌や仲麻呂の説話・歌に改変を加えるなど、脚色を施している。この態度は、「土佐日記」全編を貫く精神でもあった。